

昌平石刻園訪碑記

森田 憲司

2005年3月の北京調査の第一の目的は、昌平区にあると聞いた碑林の調査であった。昌平に碑林があるらしいという情報を寄せてくださったのは、この科研のメンバーである船田善之氏で、北京の石刻芸術博物館に拓本が展示されている、「昌平区創建石橋之記」（以下「石橋記」）を我々の研究会で読んだ際に、知人が昌平に碑林ができていたと言っていた、と教えてくださった。『北京市昌平区地名志』（北京出版社 1997）などの文献によって、昌平区には他にもかなりの数の元碑があることを、かねて知っていたから（森田「北京地区における元朝石刻の現況と文献」『科学研究費基盤研究B「碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究」報告書』 2002参照）、この「石橋記」に限らず、それらの石刻がこの「碑林」に移動している可能性も考えられた。

北京到着の翌日、3月4日に現地へ向った。当日は、その頃北京に留学しておられた飯山知保（早稲田大学大学院）、向正樹（大阪大学大学院）、村井恭子（大阪市立大学大学院）の3名が同行し、調査に協力してくださった。碑林は昌平公園にあり、公園は旧城内にあることが、事前にわかっていたので、現地へ辿り着くまでには苦労はいらなかったが、この時期の北京としては寒い一日で、寒風も強く、碑林では日陰に雪が凍りついていて、必ずしも調査に適した時期ではなかった。

昌平公園の入り口で場所を聞き、公園の西南隅にある碑林に行くと、かなりの数の「石刻」が集められていた。もともと、よく知られているように、中国では「石刻」の語は、石像、摩崖などの、「石に刻されたもの」一般を指し、ここでも、石碑や墓誌以外に、石人や石獣、台座なども並べられていた。碑はいくつかのグループに分けられて立てられており、一部の石碑や墓誌がコンクリートで固められているのを除くと、野立ちのままである。鉄柵で囲まれてはいるものの（この鉄柵は石刻を使ってトレーニングをする人が多いために設置されたものと、後で知った）、調査にとくに支障はなく、自由に見て、写真撮影をおこなうことができた。また、周囲にはまだ地上に転がされたままのものもかなりあった。なお、この碑林は、正式には「昌平公園文物石刻園」（以下、石刻園）という名称である。石刻園の面積は1,148㎡あり、公園、石刻園ともに入場は無料。

『昌平区文化文物工作大事記』（北京市昌平区文化委員会 2003）によれば、2000年4月の中旬に文物管理所が田野石刻調査をおこない、区全体で散乱している石刻60余を発見し、統一保護の必要が求められた。同年12月23日に、半年間の「石刻回帰工作」が一段落を告げ、収集した石刻が100件余りあり、そのうちの55を公園に置いたとある。また、『昌平文物工作』の創刊号（2001）に掲載された「集異処流散石刻 成公園一方勝景」という記事に、石刻園成立の経緯が記述されており、それによれば、2000年の初めから区の文物局などが区内の各地に散在する石刻の収集をはじめ、とくに昌平旧県、南口太平庄、馬池口辛店などで収集をおこない、昌平公園の西南角を石刻園とし、それらを展示したものだという。一方、園内に置かれた「石刻文物園記」には、

「昌平区文化委員会 2001年10月」とあるから、この時期に一応の完成をみたのであろう。

同じく『昌平文物工作』の総2期(2002)には、「昌平公園文物石刻園簡介」という記事があり、石刻園所在の「石刻」59点が写真入りで一覧できる。そのうちで文字の刻されている石刻は、筆者の数えたかぎりでは、断片も含めて29である。上にも書いたように、まだ集められた石刻が散乱している状態で、文字が刻された石刻にも、寝かされたままのものがあつた。今後の整備が期待されるが、6月に再調査をおこなった際の印象では変化は感じられず、どの程度の作業が継続しておこなわれているのかはわからない。ただし、『昌平文物工作』の4号(2003)には、「田野石刻回帰石刻園」という清代の石刻を石刻園に移管した短報があるし、「文物大事記」の類(補記参照)にも、発見された石刻を石刻園へ移動させた記事がいくつか見えるので、収集はさらに進行中と考えられる。上でも述べたように、昌平区には遼金元の石刻が少なくないので、石刻園の今後の活動に注目しておきたい。

さて、今回は石刻園で元碑を2つ見ることができた。1つは上に書いた「石橋記」、もう1つはかねて昌平の旧県村にあるとされていた「狄梁公祠堂記」(以下、「狄公祠記」)である。どちらの石刻も文字は深く彫りこまれていて、一部の剥落と「狄公祠記」の下の何字分かを除いては、明瞭に読み取ることができた。以下に述べるように、両碑ともに碑陰に題名があり、多数の人名が刻されている。このうち、「石橋記」は、新出の石刻であり、碑陽の拓本こそ上述のように石刻芸術博物館に展示されているものの、図版が公刊されたことはなく、碑陰の題名については、今回はじめてその存在を知った。また、両碑の碑陽、碑陰ともに録文やその内容を用いての論考などの存在を知らない。ここではこの2つの石刻について、簡単に紹介することとする。

まず「石橋記」であるが、この石刻は新出のもので、2000年4月26日に馬池口鎮辛店村北沙石場の工事現場の地下2mから出土した。次いで5月10日には、跌も出土しており、現在では一体のものとして組み合わせて立てられている(『昌平区文化文物工作大事記』)。碑陽の記文については、上にも書いたように北京石刻芸術博物館に拓本が展示されているので、この拓本をテキストとして、すでにこの科研の研究会で会誌済みであり、撰者黄潛の『金華黄先生文集』(四部叢刊所収)巻9に収められたものと比較して、若干の文字の移動はあるが、内容に大きな違いはないことを確認している。内容は、県尹として赴任した畢文質によって、後至元2年(1336)に橋が架けられたことを記したものである。出土地である馬池口鎮辛店村北沙石場の位置の確認はできてはいないが、現在でも京包線は馬池口鎮を通り抜けており、記文中にも、「由都城北抵上京、其駅十有二、而昌平之為県、当其第一駅」、「大駕時巡、次舍在焉」とあるように(碑面からの録文による、以下同じ)、当時の大都から上都へ抜ける駅道が昌平県を通過しており、カアンの大都・上都間の移動にもこの道が使われた。この石刻が立てられたのは翌年の後至元3年である。文中の記事によって、碑陰の題名にも見える前提領昌平駅の宮君琪の依頼によって執筆されたものであることや、碑が河岸に立てられていたことがわかる(掌其駅事者宮君琪持父老之言來諭曰、(中略)悉願紀成事并附見其治行之概、勒諸岸左以貽永久)。また、この碑文の撰者は承直郎国子博士黄潛、筆者は応奉翰林文字徵事郎同知制誥兼国史院編脩官貢師泰、篆額は奉直太夫監察御史李思齊である(官銜は碑面の表示による)。著名人が関与し、しかも文集にも収められている碑記

が新たに出土したという点からも注目に値する。

碑陰に列せられているメンバーは、前任、現任の昌平区ダルガチからはじまって、県尹以下、県の官員、吏人の名前がまず並び、ついで書院、儒学、医学、陰陽学関係、駅関係者と続いて、「土庶耆老」の名前が並んだあと、最後に商税務の関係者の名前が結び、監造官や石匠などの立石関係者の名前でおわる。

一方、「狄公祠記」は、かつて幽州都督であった唐の名臣の狄仁傑を祀った廟の碑記で、大徳4年(1300)に立石されたものである。『北京市昌平区地名志』や『昌平文物探尋』によれば、旧県村にあった祠廟はいつの時代にかすでになくなっており、本碑を含めて、乾隆39年(1774)に至る7つの石刻が残されていたが、いずれも現在は石刻園に移されている。この碑は、碑陽の記文、碑陰の題名のいずれも、『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』の第48巻の158,9頁に拓影が掲載されている。それを見てもわかるように、下部が欠落していて各行とも最後の何字かを欠く。こちらの碑陰の題名についても、これまで紹介されたことを知らない。やはり多数の人名が刻されており、碑陽には、「立石」として、ダルガチ、県尹、主簿、県尉、典史が名を連ね、碑陰に列せられている名前には、県その他の官衙の司吏、典史、提領など、首領官レベルとともに、郷村の人々の名前が多数見えるのが特徴であろう。この題名についても、図版は公開されているものの、筆者の知る限りでは未紹介である。

これら2つの碑記の題名は、時期は30年ほど隔たっているが、地域的に重なっており、大都近郊の地域社会について考える上での貴重な資料であると考えられるのであるが、上で述べたようにこれまで取りあげた論考を知らない。森田は、帰国後に、現地で撮影した写真に拠ってこの2つの題名の録文を作成し、2005年4月のこの科研の研究会において調査の報告をし、参加されたみなさんに検討していただいた。また、光線の角度の関係などで写真の中に文字が判読しがたい部分があったことなどから、録文が不十分な箇所がまま残されたので、6月に再度現地に赴いて調査し、録文の完成度を高めた。再調査に際しても、向氏が同行、協力してくださった。2つの碑陰の録文については、さらに内容を検討の上で、機会を見て公開したいと考えている。

石刻園の石刻で、この2つ以外に筆者の印象に残ったものを挙げると、やはり狄公祠にあった、宋の范仲淹の「大唐狄梁公彭沢県碑記」を明の崇禎16年(1643)に刻した石刻や、「重修狄梁公廟碑記」(崇禎12年)などの明代の石刻、清朝のものでは、咸豊年間の「薬方碑」や地域の祠廟関係の石刻、とくにその碑陰の題名がある。経幢も数件あった。もっとも、その中には同治9年(1870)の「城隍廟重修碑記」のように、いまだ倒れたままのものもあるが。

ついで、さらに城内中心部の府学路にある、昌平区の博物館へ赴く。2004年に公開されたという8階建ての立派な建物である昌平区文化館の中にあり、図書館なども同じ建物に入っていた。2階が文物関係の展示室にあてられている(入場無料、写真撮影可)。展示は、地域の文物、とくに出土文物を中心とした展示で、新石器時代から近代に至る文物が展示されており、遼金元時代のものも含まれる。ちなみに、5,6階にも他分野の展示があるとのことであったが、今回は見なかった。石刻に関しては、「大元国大都路昌平区昭聖禪寺故先師雲峰檀公禪師道行石幢之記」(以下「檀公道行記」)が展示されていたほか、金碑が1つあった。「檀公道行記」は、各種の文献では石刻園にあるとされているが、ここにあった。また、金碑は白石に刻されている上に

彫りが浅く、うまく内容を読み取ることができなかった。次回訪問される方の精査を期待する。明の墓誌も展示されていた。

「檀公道行記」は、もともとは昌平区昌平鎮旧県村にあったもので、八角の石柱で、禅師の伝記のほか、碑陰には題名や寺産四至が刻されているが、博物館では壁に近く置かれていたため、後部を丁寧に見ることはできなかった。その年代については、『金石彙目分編』は至元23年(1286)とし、拓影を掲載する『新中国出土墓誌・北京[壺]』(中国文物研究所・北京石刻芸術博物館編 文物出版社 2003)も同じ比定であるが、これは、文末に「至元□年」とあるので、檀公が没したのが至元22年12月であることから考えて、23年としたものであろう。それ以外には年代比定の根拠は確認できていない。

展示室を参観した後、同じ建物の8階にあった文物管理委員会の事務室で、以下の文物工作関係の雑誌と書物を入手することができた。

『昌平区文化文物工作大事記』(北京市昌平区文化委員会 2003)

『昌平文物探尋』(暁陽著 金城出版社 2003)

※本書の著者暁陽の本名は楊広文、昌平区文物管理所長

『昌平文物工作』1～8期(2001-2004)

この原稿を作成するにあたっては、これらの文献に助けられたが、とくに、専著である『昌平区文化文物工作大事記』が1929年～2001年を対象としているほか、『昌平文物探尋』に1949年～2003年10月分があり、『昌平文物工作』も「大事記」を連載していて(2003年6月までを確認)、少しずつ内容を異にする。石刻園に限らず、昌平区(県)の文物工作関係の事項については、適宜それらを参照した。

なお、同行してくださったお三方には、現地での調査活動だけではなく、不明瞭な部分の録文にあたっては撮影された写真を提供をいただくなど、その後の作業にもご協力いただいた。向氏は、6月の再調査にも同行し、お手伝いくださった。お礼申し上げます。

最後に、例によって、森田目録からこれらの元碑についてのデータを転載しておく。これらのデータは今回の訪問後に補訂したものであり、この文章でのこれまでの記述と重複する。各石刻の前の番号は森田目録のもので、目録発表後に追加した石刻については、後にローマ字を付して配列している。

022 大元国大都路昌平県昭聖禅寺故先師雲峰檀公禅師道行石幢之記(首題)[從檀]

至元二十□年(『金石彙目分編』作23年[北目注]、新出も23年、22年12月没ゆえ23年か?)

昌平区昌平鎮旧県.

新出:原存昌平区昌平鎮旧県村,2000年移交昌平区文物管理所.現存昌平区文物管理所.

※2005年3月昌平区博物館で現物確認.

碑陰:題名,寺産四至.

《北目》,《池内》339.《新出》図66

※『昌平県地名志』(旧県)の「村南有観音菩薩廟有唐元代經幢等」はこの石刻か.

028 □□ [昌平] 県狄梁公祠堂記

大徳4年(1300). 昌平区昌平鎮旧県村北.

《精粹》碑原在昌平区昌平鎮旧県村狄梁公祠遺址内

※2005年3月昌平文物石刻園で現物を確認. 石刻芸術博物館に碑陽の拓本を展示.

碑陰: 題名.

「昌平公園文物石刻園簡介」『昌平文物工作』2002-1

《北目》, 《北拓》48-158 (碑陽, 碑陰とも).

拓影: 『昌平県地名志』.

写真: 《精粹》130

『昌平文物探尋』(曉陽著 金城出版社 2003) に狄公祠の記事.

075a 昌平県翔建石橋之記(篆額)

至元2年(1336), 立石は至元3年.

※2005年3月昌平文物石刻園で現物確認. 石刻芸術博物館に碑陽の拓本を展示.

2000年4月26日馬池口鎮辛店村北沙石場で出土 (『昌平区文化文物工作大事記』)

「昌平公園文物石刻園簡介」『昌平文物工作』2002-1

碑陰: 題名

(もりた けんじ 奈良大学)